

翻訳論にいたる道

山 本 史 郎

このたび、『翻訳の授業—東京大学最終講義』なる一書を朝日新書として上梓しました。当初は2020年1月ごろの出版のつもりで、昨年の11月に脱稿しましたが、きっと、あまり売れそうにないと出版社のほうで考えたからでしょう、書籍の動きが良い4月出版の予定となりました。ところが、ご存知のコロナ騒動で、全国の書店から人の足がぱったりとだえたため、6月刊行となり、やっとのことで日の目を見ることができました。

私にとってこの本は、英語の教科書や、英語テキストの読解実践の本を別にすれば、4冊目の著書です。さっそくその内容についてお話ししたいところですが、その前に、これまで書いてきたのがどんな本たちだったのか、自己紹介をかねてご紹介したいと思います。

東大の教室で読んだ『赤毛のアン』

1冊目は2008年出版の、『東大の教室で「赤毛のアン」を読む』というミーハーな題名の本でした。この本は、東大の教養学部1年生（文科三類）のゼミで行った授業が基になっています。一言でいえば、文学作品の読み方を教えるのが目的ですが、様々な単位、すなわち1単語、1文、1段落、1シーン、1章、そして物語全体など、様々な単位で何に注目すべきか、小説をただ単に解釈するというより、文学はどのような構造から意味を生み出そうとするのか、どんな仕掛けがどんな意味を生み出すのかというような視点に立って、手とり足取り教えようとする本です。また、イギリス小説には伝統的に「目覚めのパターン」、すなわち主人公が様々な試練に出会った結果、自己や社会について何かを悟るというパターンに則って物語のプロットが作られることが多く、作家というものはほとんど無意識にこのようなパターンで物語を書いてしまう、あるいは書かさ

れてしまうものだ、というところまで踏み込んでいます。

教室で教えたときには、40名の定員に対して160名以上の受講希望者がありました。それもそのはず、いやが上にも学生の興味をひくように、『赤毛のアン』、『ホビット』、『ジェイン・エア』、『高慢と偏見』、『大いなる遺産』、あげくの果てにごぞんじ渥美清主演の「男はつらいよ」など、様々の有名作品を取り上げているばかりか、映画バージョンもふんだんに用いて、作品の意味作用のメカニズムを検証するというサービスぶりでした。しかも、本にしたときも論文調ではなく、授業の実況的なふんいきを出すために、ところどころに先生と学生がかわすユーモアたっぷりの対話を入れました。

いくつかの章が出来上がったところで、出版してくれる会社をさがしました。ところが、さる有名出版社の新書にことわれ、とある大手出版社にも無惨にも袖にされてしまいました。内容があまりに深遠すぎたのでしょうか？ ユーモアばかりめだって、まじめなガクジュツ書に見えなかったからでしょうか？ たぶんこの手の本として類書がなく、凡庸な編集者どもの理解を超えていたのでしょうか。ところが捨てる神あれば拾う神ありとはこのことで、精神が柔軟で、懐の深い東京大学出版会が救いの手を差し伸べてくれました。そして出版を引き受けてくださったばかりか、『東大の教室で「赤毛のアン」を読む』というすばらしい題名までプレゼントしてくれました。

キャッチーな題名だからすごいベストセラーになったでしょう、などよく人から言われますが、それは買いかぶりというものです。初版の3500部が何年かで売れ、親切的な編集担当の方のお世話で増補改訂版を3年ほど前に出してもらった程度です。

ゲラゲラ笑って英文学を読み直す

しかし、この本は私の人生を思わぬ方向へと導いてくれました。講談社の「学術選書メチエ」の編集者の方が読んでくださり、似たようなコンセプトで、「縦書きの本を書いてみませんか」というお誘いをいただきました。前掲書『東大の教室で…』は英語の引用も多かったので横書きでしたが、こんどはもっと一般読者にも親しめる本を出してみないか、ということです。

ところで、このとき編集者がいちばん注目していたのは、何だと思いますか？

それはユーモアです。つまり、英文学の有名な物語について、ユーモアたっぷりに論じた本を出したいということでした。私は最初、このユーモアについての思い入れがどの程度なのか分かっていませんでした。

ところが、本の構想が見えてきた段階で、私としてはちょっと構えて、鹿爪らしいプランを立ててお話ししたところ、編集者の顔にみるみる黒雲が広がっていくではありませんか。そして、あなたの本からユーモアを取ってしまえば何も残らない……とは言いませんでしたが、この企画はユーモアが売りなのだとお説教されました。そこで心を入れ替えて、もっぱら冗談を盛り込むことに腐心しながら執筆に励みました。「心を入れ替えて」と言いましたが、私にとってはむしろ我が意を得たりともいうべき方向転換でした。何しろ、高校生のころ、あこがれの職業は噺家でしたから。

さて、こんな「コンセプト」ではありますが（いったいどんなコンセプトやねん!）、『秘密の花園』、『ロビンソン・クルーソー』、『荒涼館』、『マクベス』、『アーサー王伝説』などをテーマに、名作英文学の読み直しを行いました。

こうしてぶじにゲラが出来上がりました。「メチエ」ではゲラの段階で、編集長に通して読んでもらうのが決まりなんだそうです。編集者いわく。「編集長、きまじめな顔で読んでいたのが、第3章の、XXのくだりまできたらついに我慢できなくなって、嘔き出しました」と。やっぱり、いちばんの評価基準はユーモアだったのです！

編集長ばかりではありません。うちの奥さんの友人の、さる国文学者の方に謹呈したところ、「ゲラゲラ笑えてお

もしろかったけど、少し時間がたったら何かが書いてあったのか覚えていない」と、のたまってくれました。私の中の噺家はニンマリですが、英文学者はベシャンコです。内容充実、諧謔豊富、滋養強壮の本書（『名作英文学を読み直す』2011年）も、期待通りには売れませんでした。

空っぽのドル箱

このあと、朝日新聞出版でTOEIC本などドル箱の本を次々と叩き出している、編集者の青年から話をいただいて、『読み切り世界文学』（2015年）を上梓しました。編集者もこれは売れ筋の本だと意気込んで、装丁も凝りに凝って、新進の画家に挿絵まで描いてもらったのですが、またもや販売的には期待はずれでした。取らぬ狸の金時計は、今回も黄金の輝きを夢の中にとどめる結果とあいなりました。

『赤毛のアン』に「わたしの人生は無数の失敗が埋まっている墓場みたいなものだ」という名文句がありますが、この私の人生は、「売れない本の亡骸が埋まった墓場のようなものだ」といいたくになります。というのも、これまでに著書のほかにポピュラーな本の翻訳書も数十冊出していますが、ほとんどが売れないものばかりなのです。

しかし、刀折れ力尽きる前に、またぞろ、しょうこりもなく本を出しました。それが、冒頭にご紹介した『翻訳の授業』です。4冊目とはいえ、この本はこれまでもまして、私にとって重要な本です。その理由を解き明かそうとすれば、半世紀以上の歳月を遡らなければなりません。それというのも、わたしの翻訳への関心は中学生のころに芽生えたからです。

児童書から漱石へ

小学校上級から中学校にかけて、様々な大人の本へと目が開かれてゆき、世界が急に広がったような感覚を経験する人は多いのではないのでしょうか。

ここで、いささか個人的な思い出にふけることを許していただきましょう。私の場合は、父親が本ならいくらでも買ってくれるという教育パパだったので、様々な児童書を読む機会に恵まれました。『小公女』、『秘密の花園』、『みつばちマーヤの冒険』、『水滸伝』、『西遊記』、『アーサー王

物語』などをはじめとする様々の海外の物語（子ども用に易しくリライトされたもの）、アーサー・ランサム『ツバメ号とアマゾン号』、『ツバメ号の伝書バト』、『黄金虫』などボーの短編、『トム・ソーヤの冒険』、15巻の「世界ジュニアノンフィクション全集」、12巻の子ども用の日本歴史全集、野口英世、エジソン、ペープ・ルースなどの伝記、そして日本の物語では『次郎物語』、『路傍の石』、宮澤賢治の童話集などがとくに記憶に残っています。これは内緒ですが、よく「頭が痛い」と学校をズル休みし、頭痛薬を飲まされながらベッドの中で本を読んでいたのを思い出します。

たぶん小学校4年生だったと思います。このようなわが蔵書に、父親が勧めてくれた「児童日本文学全集」の夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介の巻が仲間入りしました。子ども用の文学全集とはいえ、噛み砕いて糖衣にくるんだリライト版、食べやすく消化しやすくしたヤワなものではありません。原文そのままです。注釈もあまり多くはありません。

鷗外の「山椒大夫」をはじめとするいくつかの物語、芥川の「鼻」、「芋粥」、「トロッコ」、「蜘蛛の糸」など比較的素朴な短編はそのころ読んで面白いと思った記憶がうっすらとありますが、「羅生門」はとくに印象にありません。きっとよく分からなかったのでしょう。漱石については、『坊っちゃん』は夢中になって読みましたが、『吾輩は猫である』は、面白くないという記憶がはっきりと残っています。

ところが中学生になって多少は頭が成熟したのでしょうか、それとも単に大人の気分になっただけのことかもしれませんが、『吾輩は猫である』はとても面白い本であることを発見し、何度も繰り返して読みました。その余勢を駆って『草枕』を読みましたが、こちらは中学1、2年のレベルをはるかに超えていました。

翻訳への目覚め

こうした本に加えて、推理小説の面白さに目覚めたのもその頃です。小学校6年生のころ創元推理文庫に収められていたシャーロック・ホームズの物語を読み尽くしたのがきっかけで、当時主流であったエラリー・クイーン、ヴァ

ン・ダイン、アガサ・クリスティーなどへと読書の範囲を広げていきました。

さてここからが本題です。言うまでもなく、娯楽本とはいえ推理小説の翻訳にはとても優れたものもあります。チェスタトンのブラウン神父シリーズの、福田恆存による翻訳は素晴らしいと思います。しかし、その反面、右から読もうが左から眺めようが、さかさまにしようが、どうしても意味の通じない箇所が続出する翻訳も、かなりありました。ちょっと考えてみてみてください。推理小説なのでどんどんテンポよく読みたいのに、意味がさっぱり分からない。これほどイライラさせられることはありません。

そんな時、私は、ほんらい外国のものだからわけがわからないのは当然だ、とは思いませんでした。げんに、意味がすっきりと分かる翻訳も多々あったからです。そもそも、幼いころ読んだ西欧の物語は、抄訳ではありますが、どれもきちんと理解できる日本語で語られていました。

生来ナマイキな私は、弱冠15、6歳の高校生でたらに、自分の頭が悪いから意味が分からないのだとも思いませんでした。頭の悪いのはむしろ翻訳者なのだと決めつけました。その乱暴極まりない論理はこうです。一私程度の者でも、漱石、鷗外、龍之介の文章は曲がりなりにも理解できる。超一流の文豪と称される人たちの文章はよく分かって、一介の翻訳者の文章がよく分からないとすれば、どちらの文章がまずいのか、誰の頭が悪いのか、そんなことは考えるまでもないではないか！

こうして翻訳の質のよしあし、さらには翻訳とは何だろうという根本的な疑問が、私の心を占めるようになりました。高校生のころは、英語大好き、国語大嫌いでしたが、文章を書くことは好きだったので、英文解釈の副読本を、得意になってあたかも翻訳家になったかのように訳しました。漢文訓読体を含めて、様々な文体を使って遊びました。いまでもそのときのノートが残っています。

また、中野好夫訳のモーム、米川正夫訳のドストエフスキーに出会ったのもその頃です。中野好夫は偽悪家なので、「誤訳は布団のホコリのように叩けば叩くほど出てくる」などと述べています。中野自身の翻訳について、それがじっさいどれくらい当てはまるのかは知りませんが、『人間

の絆』、『月と六ペンス』など中野の翻訳は、読んでいて意味の通らない箇所は一箇所もないところと、中野調としかいいようのない、少し関西風味の混じった独特の文体に魅せられました。また中野好夫とはかなり毛色がちがいますが、米川正夫も、硬質の文章に、さばけた下町風の表現がちらちらとまじる名文がとても好きでした。

行き詰まった研究

大学、大学院ではディケンズを研究の中心に据えてイギリス文学を修めました。そして修士となり、博士課程に1年在籍したのちに、大阪市立大学に奉職し、6年つとめた後に、古巣の東京大学教養学部で教鞭をとることになりました。

同僚として迎えてくれた恩師たちには黙っていましたが、実はそのころ研究に行き詰まりを感じていました。

私は文学作品を読むのは好きですが、当時、文学研究のタイプとして一般的であった作品の解釈を自分が行うことについては、懐疑的でした。ある作品を読んで私自身が何かを読み取り、何かを感じたとします。それを作品や作者の伝記等によって根拠づけることはできます。しかし、いかに精緻に論じたとしても、私の感想など人に見ていただくほどのものではないと思いました。

では、実証研究はどうでしょう？ 作家のマニュスクリプトを調べて、新たなことを発見するというのは、すばらしい研究です。しかし、40年前、日本にいてイギリス文学の実証研究を行うことはまず不可能でした。しかし、そのようなテクニカルなことは別にしても、実証研究に打ち込むには、イギリス文学・文化を無条件に肯定し、自らイギリス人になりきる（すなわちテキストや作家が価値あるものという前提を疑わないこと）が絶対条件ですが、それは自分には不可能だと思いました。わたしがそれを選ぶかどうかの問題ではなく、そもそもそうするには、わたしのイギリス体験、イギリス文学の知識はあまりに乏しいと感じたからです。

では、「文学理論」はどうでしょう？ 構造主義、精神分析等々、文学の外で流行している思想や概念を用いて、文学作品を論じようとする動きは、わたしがちょうど大学

院生だったころにはじまったように思います。しかし、わたしはこうした方法論にはきわめて懐疑的でした。それはわたしが理論や論理を嫌うがゆえでなく、むしろ甚だしく偏愛するがゆえです。当時、「理論」にかぶれると、門外漢に分からない（そして門内漢が見たらたぶん支離滅裂の）概念や用語を振り回すのがパターンでしたが、ほとんどはでたらめなラベルを貼り付けているだけで、論理的な展開と、学問コミュニティでの発展的議論へとつながるようなことは皆無でした。「文学理論」と称するものは、本来の厳密な意味での理論的営みではなく、理論的営みをやっているかのような自己満足、いわば「理論ごっこ遊び」だと私は感じました。（ただしこれは3, 40年前の状況であり、現状についての観察ではありません。念の為。）

解釈の解釈

私の興味は、ふつうの読者、研究者や批評家が文学作品を読んだ場合に、それを理解するプロセスはどのように行われるのか、というところにありました。もっと簡単にいうなら、「○○のように書かれているから、普通の人なら××のように解釈する」というような、ある種の構造が、文学作品には存在するはずで。そのような文学的コミュニケーションは、何によって成立しているのか、という問題です。

「山本君は、つまらないことに興味をもっている」と言われたことがあります。たしかに、私は「当たり前の解釈」に興味がありました。しかし、当たり前の解釈を自らすることに興味があるわけではありません。

そうではなく、当たり前の解釈がなぜ成立しているのかということの説明することこそ、本当の学問だと思ったのです。つまり解釈を解釈するのです。ある文化の中にいる人間が無意識に、一定の行動をとってしまうのはなぜか？ これは哲学、社会学等でも重要な発想だと思いますが、文学を書き、読むという人間文化の中の重要な営みのなかで、どのような無意識の前提が作用しているのか、それを研究するのが本当の「文学理論」ではないか、と思いました。

しかし、そんなふうな関心をもっている人は私以外には皆無で、どう研究を進めたものか見当もつきません。首根

っこをおさえてやろうと思うのですが、つるつるの頭をどう掴んでよいか分からない、とでも言いましょうか。そんなわけで、呆然と手をつけかねたまま時が流れ始めました。

リストラもまた愉しからずや

ところで、なんの取り柄もない私の人生ですが、自慢すべきことが2つあります。1つめは髪結いの亭主をやったこと、2つめはリストラに遭ったことです。どちらもなかなか狙ってできることはありません。

髪結いの亭主のほうは大学院生のころに結婚してムニャムニャムニャなので、今はリストラのほうをお話ししましょう。東大の教師になって5年ほどたったとき、言語情報科学という大学院の専攻が誕生し、そこに配属されたのが、わたしのリストラ体験です。「えっ、それだけ？」と思われるでしょうが、私は「言語情報処理」の講座にはりつけの刑にされ、コンピュータ言語を教えることを期待されました。私の日常は、C言語やunixの使い方などを教える傍ら、専攻のサーバーの立ち上げや管理をする日々へと一変しました。しかし…しかし、です。私は、水を得た魚のように、夢中で仕事に打ち込みました。なんだかんだいっても、おもちゃで遊んでいるようなものだからです。

その際、英語を志した漱石が漢籍を売り払った故事に倣い、嬉々として「文学理論」の本をゴミ箱に捨て、文学の研究書を押し入れにしまって、コンピュータ言語の本の熟読とプログラミングに明け暮れました。楽園は6〜7年ほど続きました。

翻訳論への道

しかし、そうこうするうちに親切的先輩の先生や、知り合った出版社の編集者から勧めていただいて、翻訳を次々と出版させていただくようになりました。また、言語情報処理の講座には、私のように芸が身を滅ぼして専門家に化けて出た教師ではなく、本来の言語学やコンピュータ科学を修めた人に来ていただいたので、安心して椅子を明け渡しました。そして、世紀が変わったころからは、大学や大学院の授業で、翻訳の実践や、翻訳論を教えるようになりました。

こうして、高校以来の関心がようやく、大学の講壇をえることとなりました。ただし翻訳と言っても、中心は文学作品です。そして文学作品の翻訳には、「普通の人がどのように解釈するか」ということが、大きな要素を占めるはずだというのが、私の翻訳論の出発点となりました。

こうして、若い日々に停滞してしまった文学研究でしたが、その一部が、翻訳研究を媒介として実現されました。その総決算とでもいうべきものが、冒頭にご紹介した『翻訳の授業』という新書です。東京大学での授業の総決算ではありますが、これを土台にしてさらに飛躍したいと思っています。

長々と拙い話にお付き合いいただきありがとうございます。

(やまもと しろく 英語コミュニケーション学科)